

群 教 セ	H01 - 01
	令7.290集
	幼児教育

自分なりの思いや願いをもち 自分の世界を広げていく幼児を育む

——「つながりマップ」を基にした幼児理解と環境の構成——

特別研修員 川島 奈津子

I 研究の概要

1 主題設定の理由

こども家庭庁及び文部科学省が連携して策定した「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン」では、幼児期を生涯にわたるウェルビーイング（身体的・精神的・社会的に幸せな状態）の向上の基盤と位置付け、安心と挑戦の循環を通じて子供の幸福を高めることの重要性が示されている。また「群馬県教育ビジョン」（第4期群馬県教育振興基本計画）では、幼児教育を「学びの出発点」「自律した学習者の育成の土台」と位置付け、安心して挑戦できる環境づくりや非認知能力の育成の重要性が示されている。

研究協力園の幼児は、好奇心をもち、自分の好きなことや興味のあることに進んで関わって遊んでいる。しかし、興味や好奇心をもって遊び始めるが、途中でうまくいかなかったり、失敗したりすると、やり遂げようとせずにやめてしまうことがある。また、失敗することや競うこと、負けることを怖がり、取り組もうとしない幼児もいる。

そこで、温かく見守られ、支えられているという安心感の中で、「やってみよう」「もっとやりたい」「やり遂げたい」などの気持ちを幼児自ら発揮し、自分の世界を広げていってほしいと考えた。

また、友達との関わりを深める中で、前向きな見通しをもったり、自分の存在感を感じたりしながら安心して試行錯誤してほしいと考え、本テーマを設定した。

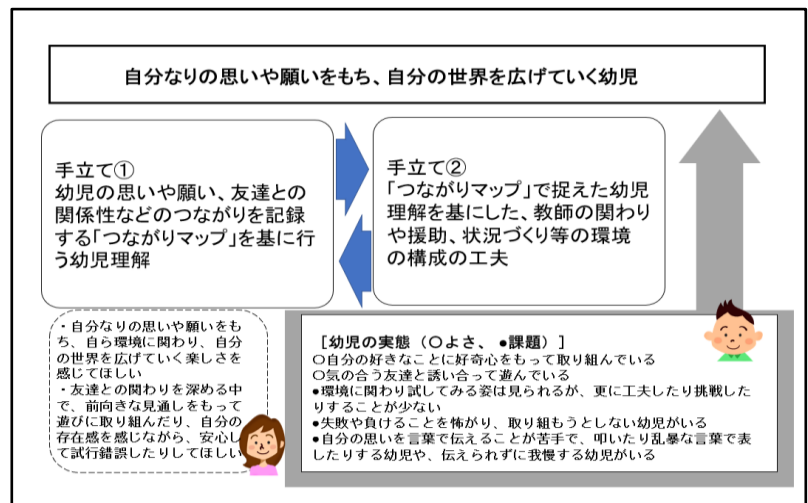


図1 研究のイメージ

2 具体的な手立て

自分なりの思いや願いをもち、自分の世界を広げていく幼児を育むために、本研究では以下の手立てを行う。

手立て1 「つながりマップ」を基に行う幼児理解

「つながりマップ」とは一人一人の幼児の心の動きを捉えながら、学級の友達や園全体の友達との関係を記録する相関図型の記録である（次ページ図2）。プレゼンテーションソフトを使って作成し、線の太さや色、吹き出しの形や色で幼児同士の関係を表す（次ページ図3）。教師の見取りや教師が捉えたそれぞれの幼児の発達の課題*や、今後の支援の方法などをノート欄に記録していく。作成頻度は、一、二週間に一度を基本とし、関係性やつながりに変容が見られたときや、教師が相関図として連続して記録したいと思ったときには、数日間続けて記録を行う。日々の保育の中で「つながりマップ」を記録し、一人一人の心の動きに目を向け幼児理解を深めることで、個々の幼児の発達の課題を把握することができると考えた。

※ 「発達の課題」… 幼稚園教育要領（平成29年告示）解説37ページより

ここでいう「発達の課題」とは、その時期の多くの幼児が示す発達の姿に合わせて設定されている課題のことではない。発達の課題は幼児一人一人の発達の姿を見つめることにより見いだされるそれぞれの課題である。その幼児が今、興味や関心を持ち、行おうとしている活動の中で実現しようとしていることが、その幼児の発達にとっては意味がある。したがって、発達の課題は幼児の生活の中で形を変え、いろいろな活動の中に表現されることもある。

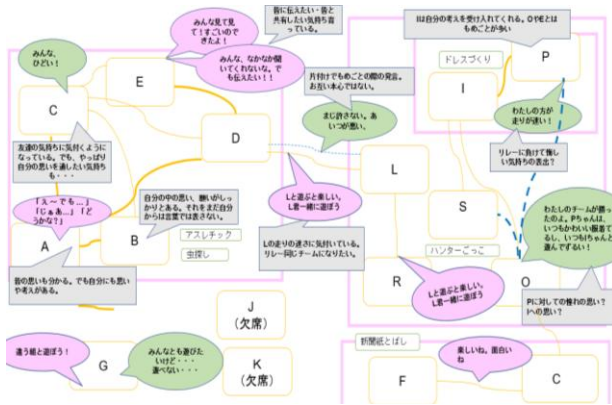


図2 「つながりマップ」の例

記号	記号の意味
オレンジの四角(角丸)	クラスの幼児
緑の四角(角丸)	幼児が取り組んでいること・遊び
ピンク色の吹き出し(丸)	肯定的な幼児の発言 プラスの感情
緑色の吹き出し(丸)	否定的な幼児の言葉 マイナスの感情
灰色の吹き出し(四角)	教師の見取り
オレンジの線	肯定的な幼児同士の関わり
青い点線	否定的な幼児同士の関わり
ピンクの枠	同じ遊びをする幼児 関わり合う幼児

図3 「つながりマップ」で使用する記号

手立て2 「つながりマップ」で捉えた幼児理解を基にした、教師の関わりや援助、状況づくり等の環境の構成の工夫

「つながりマップ」で捉えた一人一人の幼児理解から、その幼児が発達の課題を乗り越えるために必要な環境の構成を行う。幼児が温かく見守られ、安心感を持ち遊ぶ中で、自身の発達の課題を自ら乗り越えていくことで、失敗することや負けることを恐れずに、自分の世界を広げていくことができると考えた。

II 実践例

1 実践当日（10月）のねらい及び内容

(1) ねらい（5歳2学期）

- ・自分なりの思いや願いをもち、考えたり、工夫したり、挑戦したりする。
- ・友達と共通の願いや目的をもち、思いやイメージを伝え合ったり、協力したりしながら、一緒に遊ぶ楽しさを味わう。

(2) 内容

- ・自分なりの思いや願いをもち、繰り返し取り組んだり、考えたり工夫したりして遊ぶ。
- ・戸外で体を動かして遊ぶ。
- ・気の合う友達や興味が重なる友達と、共通の願いや目的をもって遊ぶ。
- ・自分の思いやイメージ、考えを友達と伝え合う。

2 保育の実践

(1) 本実践につながる抽出児（A児）の姿と手立て（1、2）について

A児は、進級当初、鬼遊びで鬼に捕まりそうになると遊びをやめてしまったり、勝ち負けがある椅子取りゲームやじゃんけん列車などの集団遊びには「負けちゃうから嫌」「やりたくない」「応援する人がいい」などと取組に消極的だったりした。

また、給食の配膳の手伝いをするに「やりたい」「手伝いたい」「まかせて」と自発的に行う幼児が多くいる中で、A児は「やりたくない」「失敗したり、こぼしたりしたら嫌だから」とやりたくない気持ちを表していた。

○4・5月 「捕まったり、失敗したりするのは嫌」

「つかまったり、負けたりするのは嫌」「でもこの方法なら参加できる」というA児の気持ちを受け止めながら、A児が安心して鬼遊びや集団遊びに参加できるよう、一度捕まってもまた復活して挑戦できるバナナ鬼や氷鬼などの鬼遊びを提案したり、勝ち負けがある集団遊びだけでなく、学級の友達とのつながりを感じたり、触れ合ったりできるような集団遊びを多く行ったりした。また、教師も仲間の一員として遊びに入り、楽しい雰囲気となるよう遊びを盛り上げてきた(図4)。

A児のやりたくない気持ちをどこまで許容するか迷ったが、給食の配膳を当番活動にせずに、やりたい気持ちや必要感をもった幼児が助け合って行えるようにした。また、A児の「やりたい」「やってみよう」とする気持ちが生活や遊びの中で発揮される状況を作ることを意識して日々の保育を行った。



図4 学級の友達とのつながりを感じたり触れ合ったりする集団遊び

○6月 「助けてくれてありがとう」

A児が、友達と一緒に鬼遊びや集団遊びを楽しむ経験を積み重ねてきていることや、自分の好きな遊びの中では、うまくいかないことがあっても、やってみようとする気持ちが少しずつ芽生え初めていることを「つながりマップ」から捉え、A児自身が「やってみよう」という気持ちを自ら発揮できるような状況を作るため、鬼役の教師がA児を意図的に捕まえた。A児は、捕まると、「捕まりたくなかったよ、嫌だな～」と顔をしかめた。捕まったことに落ち込んでいるA児に対し、友達の存在や、復活できる状況を意識して前向きな見通しをもてるよう「きっと友達が助けてくれるから大丈夫だよ」と言葉を掛けた。A児はその場に座りこんだがしばらくすると立ち上がって周りの友達にも聞こえるような大きな声で「助けて～」と助けを求めた。それに気付いた友達がA児を助けると「やったあ」「ありがとう」と笑顔で伝え、再び友達と一緒に走り始めた。

○7月上旬 「Bちゃんと一緒にやってみよう」

それまで自分からは「これがやりたい」「こうしたい」という思いを自ら表すことが少なかったA児が、「Bちゃんと一緒に遊びたい」「Bちゃんとこれを完成させたい」「Bちゃんが困っているから助けてい」などという自分の思いや願いをもちそれらを発揮しながら遊ぶようになった。このようにB児と一緒に過ごすことを喜ぶ姿やB児といろいろなことに挑戦してみたいという気持ちの芽生えなどを「つながりマップ」に記録した。そこで、二人がそれぞれのやりたい気持ちを発揮しながら、思いや考えを伝え合って遊びを進められるような状況を作り援助した(図5)。

○7月中旬 「楽しかったな。またやりたいな」

「つながりマップ」の記録から二人の心の動きを捉え、B児と一緒にこれまでやるうとしてこなかった給食の配膳にも挑戦できるかもしれないと考え、「Aちゃん、Bちゃんと一緒に給食の配膳をやってみるのどうかな？」とA児に投げ掛けた。すると、A児はしばらく考えた後、「うん。Bちゃんと一緒だったらできそう。やってみるよ」と取り組んだ。二人で一緒に配膳を行い、終わると「楽しかった。またやりたいな」と笑顔で話した。翌日も「今日もやるよ」と二人で進んで配膳を行った。



図5 思いや考えを伝え合い一緒に遊びを進める姿

(2) 実践当日における抽出児の姿と手立て(1、2)について

バナナ鬼をしていたA児が、途中で「だれも助けてくれない」と泣きながら教師に訴えた。教師が気持ちを受け止め話を聞いていると、B児が駆け寄り心配そうな様子で見たり、体を寄せたりしていた。また、一緒に遊んでいる友達もA児の周りに集まってきた。「だれも助けてくなくて悲しかった」と泣くA児に「助けてって言ったのかな？」と教師が尋ねると、A児は「言った」「でも言おうと思ったけど、声が出なかった」と話した。それを聞いたC児らは「捕まっているの全然気付かなかったよ」「うん、気付かなかった」と話した。教師は、今までの「つながりマップ」(次ページ図6)や、一緒に遊んでいた友達が泣いているA児に気づき、すぐに集まってきたり、

「気付かなかったんだよ」とA児に自分の思いを伝え、寄り添おうとしたりする姿などから、友達関係のつながりや深まりを捉えたため「助けてって聞こえたら、助けてくれた？」と尋ね、友達が自分の気持ちをA児に伝わるように表す状況づくりを行った(図7)。するとC児らは、「うん」「助けるよ」「次は助けるよ」とA児に話した。「じゃあ、Aちゃん、今度は友達に聞こえるように「助けて」って言うてみるのはどうかな？」と投げ掛けると、友達の気持ちを聞いて、安心したような表情になったA児は、「うん」と答え、鬼遊びの続きを始めた(図8)。その後、「助けて」と大きな声で友達に助けを求めるA児の姿や、鬼の動きを確認しながら捕まらないようにA児を助けるB児やC児の姿、助けてもらい嬉しそうに走るA児の姿などが見られた。

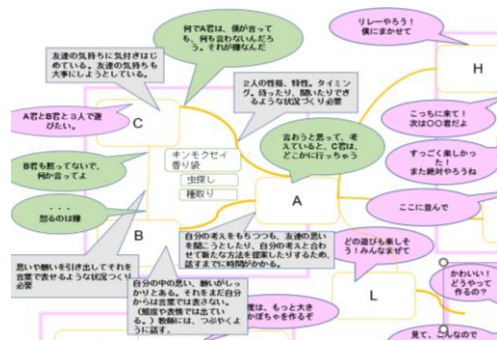


図6 10月上旬 つながりマップ



図7 自分自身の思いを伝えたり友達の思いを聞いたりする姿



図8 鬼遊びの続きを始めたA児の姿

(3) 事後の抽出児の姿

友達の存在が安心感となり、前向きな見通しをもって主体的に遊ぶようになった。以前は、消極的だったことにも安心して挑戦するようになった。長縄跳びをする友達の後ろで、A児は一緒に跳ぶまねをしていた。「挑戦してみる？」と声を掛けると、初めて挑戦し、跳べると笑顔で喜んだ。後ろで応援していたB児は、喜ぶA児に駆け寄り、抱き合っただけでジャンプをして一緒に喜んだ。

III 研究のまとめ

1 成果

- 教師は、ありのままの幼児の気持ちを受け止め、幼児が安心感をもてる環境の中で自分を発揮する状況を作り、期待をもって見守ってきた。そして幼児の心の動きや友達との関係、友達とのつながりや深まりなどの変化や変容を「つながりマップ」から捉えたときに、タイミングを逃さずに働き掛けたことが、「やってみよう」「挑戦してみよう」「やり遂げよう」などという気持ちを幼児自ら発揮して行動することにつながった。
- 「つながりマップ」で友達とのつながりや関係を捉え、それぞれの幼児が友達との関わりの中で、自分を発揮する状況や、自分の存在感を感じる状況などを作り、援助してきたことが前向きな見通しをもって、自ら主体的に行動することにつながった。
- 「つながりマップ」で、友達関係や興味・関心の関連性などを記録してきたことで、幼児の心の動きや関心の方向、幼児の実態や発達の課題などに気付き、次に必要な経験や翌日からの保育の構想が明確になった。また、一見否定的な幼児の言動の背後に幼児の主体の思いや願い、行動の意味や理由などがあることが分かった。さらに、それらの記録を蓄積したり、振り返ったりすることで、友達同士の関係性の変化や広がり、深まりなども捉えることができた。

2 課題

- 「つながりマップ」を通して幼児理解を行い、その幼児理解を基に環境の構成の工夫を行って研究を進めてきた。現在は一人で作成して活用しているが、より多面的・多角的に幼児理解を行うために、複数の保育者で作成したり、「つながりマップ」を基にカンファレンスを行ったりするなど活用の仕方を探る必要がある。